



世界水準の医療提供や研究活動に加え、患者や家族、地域を思う心からの奉仕の実践がなければ、病院も地域が欲する共通資本として育んではもらえない

骨髄炎、潜水・潜函病による骨壊死、高圧酸素療法など、整形外科分野における世界トップレベルの研究と治療で実績のある川島整形外科病院の川島眞人理事長。1981年、郷里の大分・中津城下町に開院してからは、国内外から延べ28万人以上が治療に訪れている。人口8万5,000人強の地方都市にあって「世界水準の医療で、地域の医療と文化と社会の発展」に取り組む川島氏に、お話を伺った。

医療法人 玄真堂 川島整形外科病院 (大分県・中津市)

理事長 川島 眞人 氏 Mahito Kawashima

高校2年生の終盤に続いた微熱が 進路を医学部へと変更するきっかけ

「最初は造船技師を目指していました。当時は、造船業が日本一と言われていましたから、一番デカイ船を造りたかった」

それが高校2年生も終わろうかという時期に、転機が訪れる。1ヵ月くらい37度3～5分の微熱が続き、どうしても下がらない。身体がだるくて部活の柔道が続けられなくなり開業医に診てもらおうが、どこも悪くはなかった。医師からは「大丈夫、必ず柔道ができるようになるから」と言われ帰宅するも、半信半疑だった。翌日、熱は下がっていた。

「こんな不思議なことがあるのか、と驚きました。理由は分かりません」

表1 ●7つのちかい

- 生命を尊重し、医療の公共性に基づき社会に奉仕することを第一前提とする。
- 病に対する同情といったわりの心を持って診療を行い患者さんに優しく親切に接すること。
- 人間形成と医療技術の研鑽をたえずおこたらないこと。
- 自らの仕事に対する責任を自覚し、より質の高い任務遂行のための努力、および創意工夫をおこたらないこと。
- 院内ではお互いの任務を尊重し、互いに譲り合って、誠実、協調、和の精神を尊ぶこと。
- 公私の区別を明確にし、清潔で規律ある院内にすること。
- 省資源、省エネルギー時代の中で光熱費の節約に努力し、物品を大切にすることを養うこと。

これほど直接的に人助けのできる医師という職業は、造船よりおもしろい、夢があると直感した川島氏は、迷わず進路を医学部に変更する。

1981年、川島氏は地域で必要とされる医療機関を目指す「7つのちかい」(表1)を掲げ、郷里の大分県中津市に川島整形外科病院を開業する。以来、世界トップレベルの研究と医療、地域になくてはならない病院として成長し、2011年には30周年を迎える。人生の師匠に恵まれたお陰だと、川島氏は振り返る。

なかでも小学校5～6年生の担任・松山均氏(現在は郷土史家)、レジデントとして師事した虎の門病院の整形外科部長・御巫清允(みかなぎ・きよのぶ)氏、勤務医時代をおくった九州労災病院の院長・天児民和(あまこ・たみかず)氏に、多大な影響を受けたという。

虎の門病院でのレジデント研修で 臨床医の基本を徹底的に教えられる

「松山先生には読書をする、そして読書感想文だけでなく体験や考えなども文章にすることを習慣づけられました」

友達との喧嘩の理由説明も文章だったという川島氏は、多忙な医師になっても本や論文を読むこと、研究論文を書

図 ●学術活動

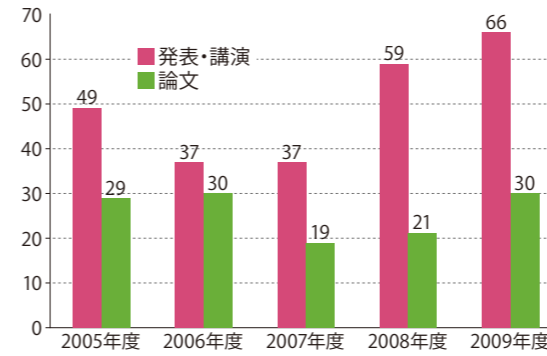


写真1



くことが苦にはなっていない。

「論文を書くのは、苦しみながらも楽しみのひとつです」

現在、スタッフの分も合わせた同院の論文数は500を超えている(2009年度は30本 図)。また看護部では市販のマニュアル本(写真1)も編集している。年間約60万円の収入は看護部の研修費にあてるなど、各部署が「楽しく意欲をもつて切磋琢磨」している。

川島氏は東京医科歯科大学医学部に進学するが、レジデントになるころ大学は学生運動の真っ最中。医局もバリケードで封鎖状態にあった。結局「各自で研修先を決める」ことになり、川島氏は虎の門病院整形外科部長・御巫氏に師事をする。川島氏の担当助教授が御巫氏と大学の同期だったことでの紹介でもあったが、虎の門病院は当時、アメリカ式のレジデントシステムをいち早く導入しており「高い水準での臨床研修制度を誇っていた」ことがレジデント先に選ぶ決め手となっている。

御巫氏は「痛風の研究では大家ですが、朝は7時ころから痛風専門外来を行う超人的臨床医」でもあった。その御巫氏のもと「病室は研究室、患者は教科書」と、徹底的に臨床医としての基本を身につけていく。

まず、自分の専門分野に関わる前に外科4ヵ月、麻酔科3ヵ月の研修がある。外科では松下良司部長の指導で、食道がん末期の猛烈な下痢患者の全身状態を改善するために窒素平衡、電解質補整、カロリー計算などを毎日行う。こうした専門外の研修も、その後の医療活動では大いに役立つことになる。

●高気圧酸素治療装置

川島氏は生後40日で右大腿骨に骨髄炎を発症し、排膿によって一命をとりとめている。それが因縁だったのか、虎の門病院でのレジデント時代に骨髄炎女性と出会い、骨髄炎治療における再発率低下がライフワークのひとつとなる。川島式局所持続洗浄チューブセットの開発により、勤務医となった九州労災病院では260人、開業してからは2009年までに640人を治療している。飛躍的な再発率低下を可能にしたのが、高気圧酸素治療の応用だった。

装置内の気圧を2～3気圧に上げることで体内の酸素濃度を15～20倍に上げると、高気圧酸素の薬理効果で感染対策、血行促進、組織の修復力や免疫力を高めることが可能となる。応用範囲は広く、川島氏の研究心を益々旺盛にしている。1億円はする高気圧酸素治療装置(写真)が3基設置されている(1基はクリニック)。



また、臨床での成果を確かなものにするための研究も、同時にやらなければ臨床医としては一人前になれないと、昼は虎の門病院で研修、夜は母校で唯一バリケード封鎖のなかった難治疾患研究所で基礎研究、日曜日は築地のがんセンターで大学の1年先輩・西岡久寿樹氏が行っている痛風・関節リウマチの研究を手伝うという生活であった。

「御巫先生の体力・気力・能力は並のものではありませんでしたが、少しでも近づきたいと思わせる求心力がありました。それにしても自分が『良く続いた』と、今は思います」

●骨髄炎女性との出会いで生まれた 川島式局所持続洗浄療法が骨髄炎治療の標準に

レジデント2年目の1970年、川島氏は「虎の門時代の最大の出会い」をする。8年間で20回もの骨髄炎手術を受けた20歳の女性である。先輩医師と患部を搔爬しても、やはり膿がでる。考えるも手だてがない。そのときアメリカ・シカゴの局所持続洗浄で治癒した症例論文を目にする。

さっそく点滴チューブで代用し、試みる。

「1回の局所持続洗浄で瘻孔が治癒しました。退院されたときは、信じられない思い、感動、そして喜びでした」

その年、川島氏は膿を排出する際にチューブが閉塞するという問題を「川島式局所持続洗浄チューブセット」の開発でクリアし、1971年には16例の結果を東京大学で開催された関東整形災害外科学会で発表する。

今では、「川島式」を使用した骨髄炎治療は、標準治療として日本整形外科学会の卒業研修ビデオにも収録され、また海外でも高い評価を得ている。

「減圧症と骨壊死」の調査・研究に届まらず 潜水士の骨壊死の労災認定1号を勝ち取る

1972年、天見氏の招聘に応じ、九州労災病院へ。

「骨髄炎の研究と治療に加え、『潜水・潜函病に伴う減圧性骨壊死』の研究を手伝うためでした」

九州労災病院では、潜水・潜函病患者に骨壊死が頻発していることは太田良実氏、松永等氏等先輩医師の調査で分かっており、高気圧治療が行われていたが、原因究明の研究は進んでいなかった。

ここでも川島氏は超人的な日々を過ごすこととなる。天見氏のもとで9～22時頃まで臨床と手術、その後に全員で術後回診、さらに深夜の2時頃まで高気圧医学、特に「減圧症と骨壊死の研究」に取り組む。有明海・大浦漁協での調査なども行い、潜水士の50%以上が骨壊死を起こしている現実、日本の潜水士の労働環境が劣悪であることも知り、労災認定にも動く。1975年には、潜水士の骨壊死の労災認定第1号を勝ち取っている。

●教育・カンファレンス

病院は人を育てる教育機関でもあるという川島氏は、スタッフ間のコミュニケーション力向上と教育体制の充実にも注力する。毎週の総回診、術前・術後カンファレンス、リスクマネジメント委員会、英文抄読会、英会話昼食会など月に20以上のカンファレンスが実施されている。虎の門時代に、自分の時間を削ってでもカンファレンスをもつことの重要性を学んだという川島氏は、「スタッフの質、病院の質が、すべて患者さんに還元される」というトップのブレない指導方針が、スタッフのモチベーションを高くするのだという。

一方で天見氏は、「研究し論文を書き、頻回に世界で発表する」ことを川島氏に指導する。

「『レベルの高い研究を発表し続ければ、必ず日本も世界的に評価されるようになる』というのが天見先生の持論でした。ですから九州労災病院時代から今日に至るまで、毎年のように海外の学会で発表しています」

その天見氏の口癖だったのが、「苦しみの中から本当の楽しみが生まれる」。

「開業してからも、国際学会に毎年、演題を発表するのは大変困難で辛いことも多いのですが、天見先生の言葉をかみしめながら学術活動を続けています」

川島整形外科病院のスタッフも、そうした「苦しくても楽しいから、おもしろいから、やっている」という川島氏の医療者としての姿勢、生き方を目標とする。「学会活動があって初めて日常の臨床に生気がみなぎり、バイオニア精神が立ち込めてくる」ものだと理解しているからだ。

世界に認められる研究・治療とともに 病院を地域の共通資本として認めてもらう

振り返れば読書は幅広く先人・社会に学ぶこと、文章を書くことは客観的に冷静に自らと向き合うことであった。それはやがて病室を研究室、社会に生きる患者の現実を教科書とするレジデント、勤務医時代に、臨床だけでなく臨床を裏付ける客観的な研究が一對のものでなければならぬとの認識に結実されていく。

骨髄炎女性との出会いがあり、九州労災病院への着任当時40%だった再発率は川島式の持続洗浄チューブセットの発明で9%にまで下がり、さらには高圧酸素療法との出会いで現在では5%台をキープしている。こうした実績は一例であるが、川島氏が臨床と研究とを一對として取り組んでいなければ叶わなかったことだろう。

「臨床で疑問に思ったこと、ヒントとなったことをテーマに更なる研究をしていく」

それが、今日の川島氏の医療者としての根幹を成し、スタッフ教育の基点となっている。それは提供する医療に留まらない。医療安全管理も含めた病院としての質向上、地域で必要とされる病院としての成熟をも意味している。

2000年に一般病院としては大分県で第1号の一般病院

種別(A)の認定を受けた同院は2010年8月、病院機能評価Ver.6を取得した。2009年度の年間手術件数は1,370件、急患数は1,528人、高気圧治療患者数は4,056人。

「リスクの高い手術をやっているが、一度も裁判になったことはない」という同院は、しかも「この10年は無借金経営」が続いている。そして今、2012年の完成を目指し、玄真堂の全医療介護施設・クリニックの全面的な増改築とシステムの改革・改善が、スタッフ主導、最終決断は川島氏というプロジェクトで動き出している。

「トップとして大切なのは、自分の理念(表2)をスタッフにしっかり伝えること。伝われば、有機的な連携とともに主

●蘭学の里

川島氏のライフワークのひとつが、中津市を「蘭学の里」として文化振興することである。中津藩の3代目藩主・奥平昌庵は母親の骨折を長崎の蘭医・吉雄耕牛が完治させたことで蘭学に興味を持ち、前野良沢を出島に派遣。前野は「ターヘル・アナトミア」を中心となって翻訳し蘭学の開祖となる。シーボルトと親交のあった5代目藩主の昌高は、日本初の和蘭辞書「蘭語訳撰」(1810年)、日本で3番目の蘭和辞書「中津バスタード辞書」(1822年)を出版し、また村上玄水に九州で最初の人体解剖を許可している。福沢諭吉だけではなく「蘭学の里」に埋もれかけた先人たちの偉業を紡いでいく楽しみは「天見先生が、温故知新として、郷里の先輩に学ぶことを勧めてくれた」ことがきっかけとなっている。日本で最初に医学会をつくった外科学のバイオニア・田代基徳、その養子は整形外科の開祖・義徳。代々中津藩医を務めた大江家5代目・雲澤は中津医学校の初代校長。日本の歯科医第一号の小幡英之助など。

その小幡英之助の没後100年にあたる2009年、川島氏の母・ミツエ氏は100歳の誕生日を迎えられた。80歳まで現役の開業医だったミツエ氏は東洋女子歯科医専門学校の2期生(1927年入学)で、おそらく現在では最年長の女性歯科医だろうということである。ミツエ氏もまた、「蘭学の里」に名を残す先人の一人である。

川島氏等の尽力で、市営の村上医家史料館(写真・上)、大江医家史料館(写真・中)が開館し、また中津城(写真・下)3階にも蘭学展示室が設けられた。



表2 ●理念

- 安心・安全・やすらぎ・心のこもったサービスを提供します
- 地域・住民・患者から評価・信頼される医療を提供します
- 絶えざる改善と生涯教育を継続し、職員個々の能力を向上します

体的に奮起してくれます」

地域にあつては社会奉仕が最重要課題だという。

「ブーメランのようなもので、治療をする、あるいは心を豊かにする、幸せにするといった社会貢献がなければ、自分たちも心豊かに、幸せにはなれません。まずは自分から、病院から社会貢献に動くことです。地域の共通資本として認められれば、一緒に病院を育ててもらえるでしょう」

「医は仁ならざるの術 務めて仁をなさんと欲す」

川島氏が医の心とする、中津藩医を代々務めた大江家の医訓である。

Profile 川島 真人 (かわしま・まひと)

1944年 中津市船場町生まれ。69年 東京医科歯科大学医学部卒業。虎の門病院整形外科 専修医(69年)、九州労災病院整形外科 副部長(79年)、川島整形外科医院 院長(81年)、86年より現職。東京医科歯科大学医学部臨床教授、北京聖濟骨髄炎医院名誉院長、新日米潜水・宇宙技術専門家会議委員、国際潜水高気圧環境医学会会員、国際整形外科学会会員、日本高気圧環境医学会副理事長、日本医史学会理事、大分県病院協会会長、中津市地方文化財協議会会長など多数。大分合同新聞文化賞(1999年)、国際潜水高気圧環境医学会チャールズ・シリング賞(2002年)、2008年度日本臨床整形外科学会学術賞(2008年)、第7回杉田玄白賞(2008年)、大分県医師会功労賞(2008年)、大分県知事賞(2009年)など受賞多数。

病院基本データ

- 医療法人 玄真堂 川島整形外科病院
- 病床数: 93床 ○所在地: 大分県中津市宮夫14-1 ○診療科目: 整形外科、リハビリテーション科、リウマチ科、脳神経外科
- 医療法人 玄真堂
- 開設: 1981年 ○職員数: 300人 ○施設: 川島整形外科病院、かわしまクリニック、(南)西日本臨床医学研究所/ハイジ、訪問看護ステーションかわしま、かわしま通所リハビリテーションセンター、かわしまホームヘルパーステーション、かわしま介護保険サービスセンター、介護老人保健施設のみ

